

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	平田 陽一郎
論文題目	隋唐帝国形成期における軍事と外交
審査要旨	
<p>本論文は、6～7世紀における中国華北地域の諸政権と、同時期のモンゴリア遊牧政権(突厥=テュルク)との国際関係のあり方、およびその混乱の中から形成される新たな軍事制度(いわゆる「府兵制」)の実態を解明した研究である。</p> <p>全体の構成は、「序説」に続いて、第Ⅰ部「華北における王朝交代と北方情勢」(3章)、第Ⅱ部「北朝後期の軍制の展開と兵士の実態」(4章)、第Ⅲ部「遊牧軍制としてみた「府兵制」の発展」(4章)、および「まとめ」から成り、本論は全11章によって構成される。各章は、新稿1章(第Ⅲ部第4章)のほかはいずれも既発表論文であり、そのうちの3章は全国学会誌に掲載された。</p> <p>従来、唐の府兵制は一般人民の徴兵制であり、制度の根幹は「兵民一致」と考えられていた。しかしながら、論文提出者は、北朝・隋・唐政権の基盤は華北に移住した北方遊牧民族を中心に形成されたのであるから、国家を支える軍事制度が兵力を農民徴兵制に依存したとは考えにくく、そこに北族的性格を見ないことに疑義を呈する。そして、府兵制の成立とは、当時の国際紛争と社会混乱とに関連づけて解明すべきであるとする。</p> <p>この問題意識から出発し、第Ⅰ部では、6世紀に北齊が北周によって併合された後も、突厥の後ろ盾を得て北齊の亡命政権が存続したこと、こうした突厥との関係は華北の政権交代をいっそう複雑化させ、その混乱から地方豪族の率いる郷兵集団が台頭してくる様子を描く。</p> <p>第Ⅱ部では、そうして台頭した郷兵集団のあり方から、西魏・北周・隋の軍制の実態を分析する。ここで明らかにされた点は、西魏・北周時代には各地に軍鎮の存在が確認され、それらには一般人民が徴発されるよりも在地の勢力が郷兵を率いて駐屯する例が多く見られること、隋代に各地の軍事拠点に置かれた軍府の兵士も依然として北周期の郷兵体制を受け継ぐものであったこと、などである。</p> <p>第Ⅲ部では、以上を受け継いだ唐の府兵制を分析する。すなわち、これまで「府兵制=一般人民徴兵制」の根拠とされてきた史料は虚構が多く、西魏・北周の「二十四軍」体制の実態とは大きくかけ離れていること、各有力者は「親信」と称される自己の直属兵団を持っており、親信のような人的結合原理は唐代の皇帝直属の「禁軍」にも見られること、などを指摘する。</p> <p>以上の分析を踏まえ、論文提出者は、府兵制とは決して一般人民の徴兵制に基づく制度ではなく、有力者間の君臣関係に基づく人的関係を基盤とした制度であり、そこには遊牧世界特有の組織原理がはたらいており、この仕組みは後世のモンゴルに見られる「ケシク」制の中国的展開の一形態であると結論づける。</p> <p>以上のように、本論文は従来の府兵制研究に大きな変更を迫るものといつてよい。分析の手段も極めて着実であり、墓誌史料などの新しい情報を取り入れ、それによる新たな指摘や解釈が随所にちりばめられている。特に、第Ⅰ部の北齊亡命政権の存在を見出した点、第Ⅱ部の「部曲」を郷兵集団内の私的隷属兵士と定義した点、第Ⅲ部の府兵制基礎史料『鄴侯家伝』の虚構性を見抜いた点、および隋・開皇10年の詔勅を、「兵民分離」から「兵民一致」の体制への切り替えではなく、郷兵集団の結合を防ぐために各集団を皇帝直属とした政策であると解し、かつて北魏王朝が自己に対抗する部族連合体の形成を防止しようとして行った「部族解散」政策と根底において相通じる政策である点を指摘したことは、きわめて重要である。まさに長年の努力の結実といえよう。</p> <p>あらためて考えてみれば、軍事制度における国民徴兵制は近代国家において初めて登場した制度であり、それは中国においても同様である。長い中国史において、西魏・北周・隋・唐前半期の約二百年間弱の期間だけが一</p>	

般人民徴兵制によって国軍が担われていたと考えるのは、そもそも不自然であった。府兵制を人民徴兵制ととらえるのは、日本では戦前の浜口重国の研究によって始まるが、それは当時の軍隊徴兵制を背景とする問題意識に基づくものであったといつてよいであろう。本論文は、その出発点ともいべき問題意識を疑ってかかり、徴兵制に代わって北族的郷兵集団制という新しい府兵制の姿を描き出した。その手腕は高く評価されるべきである。また、史料分析の能力とそれによる論理の組み立ても、十分に水準に達している。

本論文の秀逸性は、次の2点に集約される。すなわち、①北朝末期～唐前半期の展開を中国だけの自己展開ととらえず、ユーラシア史の展開に関係づけたこと、②その関係を軍事制という国家権力の根幹制度において明らかにしたこと、である。①についていえば、従来は6世紀の華北の歴史を、北周・北斉の対立と北周による北斉の滅亡、およびそれを受け継いだ隋王朝による中国統一として、単純にとらえていた。しかし、実際には遊牧勢力の介入によって当時の華北は複雑な情勢に陥り、その混乱から各地に郷兵集団が形成されてくる姿を浮かび上がらせた。②についていえば、従来の府兵制の基本史料に対して厳しい史料批判を下し、それによって新しい解釈を与え、その結果そこに北方遊牧世界の原理を見出した点である。

ただし、このような新見解をさらに確固な定説とするために、残された問題をあえて2点指摘する。すなわち、①国際紛争と郷兵集団台頭との関連性の問題、②唐代の府兵制運営の実態との関係、である。①は、当時の華北の郷兵集団が国際的な紛争を背景として台頭してくるのは提出者のいうとおりであろうが、郷兵集団そのものは前代から存在したはずであるから、その形成と実態とが明らかにされねばならない。②は、これまで唐代の府兵制は租庸調制との関連を念頭に置いて分析されてきたが、提出者の見解がそれらとどのように関連するのか、あるいはそれをも考え直さねばならないのか、という点がいまだ不明瞭である。しかしながら、これらの問題は、提出者の指摘によって、あらためて認識の表面に浮かび上がってきた問題である。その意味で、これらは提出者自身の今後の課題といふべきであろう。

本論文は、中国唐代の兵制の出発点、およびその実態を明らかにした研究である。そこで導き出された結論は、これまでの見解に対して大きな変更を迫る。そればかりか、高等学校『世界史』教科書の記述の訂正にさえかかわりかねない。したがって、本研究が今後の学界に議論を呼び起こすことは間違いないであろう。

以上により、本論文は博士学位授与にふさわしいと判断するものである。

公開審査会開催日	2014年 3 月 18 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授	博士(文学)早稲田大学	石見 清裕
審査委員	早稲田大学 文学学術院 教授	博士(文学)早稲田大学	近藤 一成
審査委員	大阪大学 大学院文学研究科 教授	博士(文学)大阪大学	荒川 正晴
審査委員			
審査委員			